二〇一四年一二月五日　開催〈本学日本研究所　講演会「第二回　世界の中の日本」共催〉

現代日本社会における親密さとは何か

エマ・ダルトン

■講演者……ローラ・デールズ（西オーストラリア州立大学准教授）、クリスティー・コリンズ（筑波大学准教授）、エマ・ダルトン（本学日本研究所専任講師）
■司会者……サウクエン・ファン（本学国際コミュニケーション学科教授、グローバル・コミュニケーション研究所所長）
■使用言語……日本語、英語
■逐次通訳……マーク・ウィンチェスター（本学日本研究所専任講師）
■同時通訳指導……曽根和子（本学英米語学科特任講師）
■同時通訳……山本みき、櫛島愛美、奥原来未、椿花緒里（以上、本学英米語学科【通訳・翻訳課程】学生）

現代日本社会は「少子化」と「晩婚」の問題に直面している。こうした状況下で、男女はどのように「親密さ」を経験しているのか？　独身が増加しているなか、人と人との親密な関係を構築する方法も多様化し、友人関係、恋人関係、夫婦関係も変わりつつある。それらの現象においてジェンダー像や男女のあり方はどのように変わってきているのか？

二〇一四年一二月五日に開催された日本研究所、グローバル・コミュニケーション研究所共催の講演会では、こうした課題について、西オーストラリア州立大学のローラ・デールズ氏、筑波大学のクリスティー・コリンズ氏、神田外語大学のエマ・ダルトンの三名の日本研究者が講演を行なった。

結婚前後の友人関係とジェンダー（ローラ・デールズ）

ローラ・デールズ（Laura Dales）氏は現在、西オーストラリア州立大学で准教授を務めている。今回の講演では、デールズ氏より、最近行なったインタビューデータに基づいた分析が紹介された。以下、デールズ氏の言葉をそのまま収録する。

デールズ： 私は、二〇〇九年から二〇一〇年まで日本学術振興会の特別研究員として一八カ月間、大阪大学に在籍しておりまして、その当時行なっていた研究が今の研究のきっかけとなりました。

未婚、離婚、晩婚の女性、シングルマザーなどの、いわゆる「典型的ではない女性」の研究の中から出てきた課題のひとつは、社会的に成人になる過程での大きな目標である「結婚」が、個人の人間関係にどのような影響を与えるのか、そして、いわゆる「婚活」をしている人が何を求めているのか、という問いでした。

もう一つ浮かんできた問いとしては、結婚していない人、しない人、したくない人を、いったい誰が支えているのか、もしくはどのような関係が支えているのかという問いです。

「家族」というのは社会的な意味での役割がまだ強いし、日本の男女の大半数が少なくとも一生に一回は結婚します。しかしながら、これから変わって行く社会のなかで、日本に住んでいる人々は、血縁を超えて他のつながりを作る必要性があるのではないかと思います。統計では、現代の未婚化、晩婚化、少子化のありようがはっきり見えます。

こうしたことの背景には、「結婚」という概念がどういうものか、男女にはどのような差が生じているかが、大きく関わっています。

開会の辞を述べる、酒井邦弥学長（兼日本研究所所長）

次に、私が行なったインタビュー調査についてお話ししたいと思います。参加者六四人のうち、女性が四二人、男性が二二人。年齢は二〇歳から五九歳の幅広い層となりました。

インタビューは一対一の形もあれば、グループ・ディスカッション（数人の友達同士の集まり）も行なっています。この研究は継続的に行なっていますが、今の段階では六四人を

対象にインタビューを行なっています。その内訳は既婚者が一〇人、非婚者が四五人、離婚経験者が七人、未亡人が一人と、事実婚者が一人います。

インタビュー調査の結果として得られた結論は、次の通りです。

結論①　女性の場合、結婚したということで社会的身分も変わる

「女」から「妻」に変わることは、結婚を通して、それまでに一人分であった家庭的なことが二人分（同居の場合は三人分、四人分となる）になるからでしょう。具体的な生活の変化もあれば、象徴的にも身分が変わって、世間からだけではなく、友達からも「旦那のこと」や「家のこと」に気を使われることになるわけです。結婚していなければ夜でも週末でも遊べるのに、結婚したら実際に自由が利かなくなる、もしくは利かなくなると思われて、どちらにしても結果的に友人との付き合い方が変わってしまうようです。

結論②　親しい人間関係の育成には余裕が必要。「余裕」というのはジェンダーと直面している

女性が結婚をきっかけに退職することの裏には、労働条件の問題があるといえます。また、そこにジェンダーが直面しているともいえます。長労働時間、通勤時間を考えると、共働きで生活をするのはもちろん難しいところがあります。もう一つは、年収が一〇三万円を超えると経済的に不利になることが挙げられます。男性より低賃金が多い女性が仕事を辞めたり、パートに変わることは理解しやすいことです。

そうすると、職場でしか築くことができない人間関係も構築できなくなります。一緒に働いて得られる達成感などが「尊厳のある関係」を育てるわけですが、そうした関係を構築することはなかなかできません。職場から離れてもその人と付き合い続けることはもちろん可能ですが、具体的な生活の違いが、会える「余裕」をなくすこともあるようです。

結論③　学生、主婦、バイトなどの常勤でない男女の友人関係は、共有の活動（趣味など）に基づいていることが多い

大学のクラブ活動や趣味を通してできた友人関係は、基本的に一緒に活動しているうちにできるものだそうです。生活が似ているというところから共通の話題や意見ができ、遊ぶ時間や活動も共通点がわりと多くなることは当然です。話が合うということは、親しい関係の基礎の一つなのです。「類は友を呼ぶ」という言葉がありますが、自分の価値観や世界観が似ている人とは仲良くなりやすいといえます。

ただし、生活に共通点があるからといって、必ずしも友達になるとは限りません。

友人関係の継続に必要なのは、生活の共有だけではなく、価値観や世界観、ほかの基本となる物事の共有です。関係性を育てるには、行動や時間の具体的な生活の共通点だけではなく、共感も重要です。

結論④　長期間の友人関係は人生の時期に応じて「実地、やりかた、プラクティス」に変化があるにも関わらず、その関係の意味や役割は個人にとってあまり変わらない

人生の時期に応じて、友達の「実地、やりかた」が変わることは珍しくありません。一九八〇年代に上野千鶴子さんは、主婦のネットワークを「女縁」と名付けました。主婦は同じ立場にいて、物理的に助け合うという役割も含めて、つながりとしてほかの欲求を果たしているのです。遙洋子さんも『女ともだち』（二〇〇八年）という本に、「一生続かないかもしれないが、限った時期でもとても重要な存在です」と書いています。やり方やプラクティスが変わるのは生活の余裕のせいでもあり、経験や要求の結果でもあるといえます。

特に女性の場合、日々の生活の優先順位が変わり、「友人関係のやりかた」に変化が生じてしまうのは当然です。

ローラ・デールズ氏

日本の独身女性の現実と現代メディア像（クリスティー・コリンズ）

二人目の講演者はクリスティー・コリンズ（Kristie Collins）氏。コリンズ氏はカナダ出身で、現在、筑波大学人文社会系准教授を務めており、筑波大学以外でも、フィンランドのアールト大学の客員教授として活躍している。

コリンズ氏は、日本のテレビドラマの分析をし、独身女性

がそこでどのように描かれているのかについて、とても興味深い話をしてくれた。コリンズ氏は以前からイギリスや欧米のメディアにおける独身女性像を研究していたが、二〇〇七年に筑波大学で働き始めてから、日本のドラマにも興味を持つようになったという。

今回の講演会では、『働きマン』（日本テレビ系列）、『Around40』（TBS系列）、『おひとりさま』（同上）、『結婚しない』（フジテレビ系列）という四つの女性ドラマを分析。また、二〇〇八年に茨城県と千葉県に住む日本人独身女性に行なったインタビューの分析も発表した。

コリンズ氏によれば、二〇一三年に放送された『結婚しない』は、『働きマン』『Around40』『おひとりさま』のいずれよりも、独身女性像が肯定的に描かれていたという。これは、日本社会の中で独身女性が実際に増えてきており、「結婚＝女性の幸せ」という社会的規範が近年変化しつつあることを反映しているのではないかとコリンズ氏はいう。たとえば『結婚しない』のジェンダー像については、下記の三つのポイントが指摘できるという。①大学の講義のシーンを通して、現代日本社会における変わりつつある男女の役割とそれに関する世間（社会からの期待）という社会的問題について、直接的に視聴者に考えさせた。②女性同士の友情を、恋人関係を含む他の関係より大事にした。③以前のドラマと違った新しい「ハッピーエンド」だった。ここに出てくるジェンダーや結婚に関する価値観は、独身女性が日本社会の中でより生活しやすくなってきていることを物語っているのではないか。

また、コリンズ氏が二〇〇八年に行なったインタビューの分析から導き出されたのは、そうだと感じる女性もいれば、そうでもないと感じる女性もいる事実だという。結婚への世間的義務感がまだ根強く残っているところもあるようだ。

「変化しつつある日本社会のなかで、ジェンダーに関する規範あるいは価値観が少しずつ変わることによって、将来的に独身女性の選択や生き方を受け入れる社会になることが期待できる」と、コリンズ氏は講演を締めくくった。

※今回の講演では、コリンズ氏が英語で講演を行ない、神田外語大学で通訳を勉強する学生による同時通訳が参加者に提供された。さらに日本研究所のマーク・ウィンチェスター先生による逐次通訳もあり、神田外語大学では初めてとなる完全バイリンガルな講演会となった。これからも学生と教職員の言語能力とスキルを活用し、日本人学生のみならず、留学生や一般参加者が興味を持ってくれるような講演会を開催したい。

クリスティー・コリンズ氏と、逐次通訳をするマーク・ウィンチェスター先生

専任講師として、CPJS（the Certificate Program in Japan Studies）の Gender and Language, The Legal and Political Systems of Japan, Japanese Popular Cultures の授業を担当している。研究専門は、日本の政治と政策とジェンダー。この研究に基づいた Women and Politics in Contemporary Japan という本を、二〇一五年二月に出版した。最近は、家族や恋愛におけるジェンダーポリティックスについての新しい研究プロジェクトを始めた。

本日は、新しい研究プロジェクトの予備的な分析結果を紹介したい。本研究プロジェクトは、日本の「オンラインマッチングサイト」を分析することによって、現代の結婚像がこれらのサイトではどう反映されているのかについて調べるものである。本研究により、日本が直面する少子化時代において、晩婚や非婚を引き起こしうる近代化に寄り添った男女関係のあり方の変化をより深く把握することを目的とする。具体的には、インターネット恋愛、結婚サイトの中の男女像を徹底的に調査したいと考えている。

昨今の新しい男女の出会いの方法には、「合コン」「街コン」に加え、インターネット上における「恋愛・結婚サービス」がある。日本のマスメディアでは、出会い系サイトは「危な

オンラインマッチングサイトのジェンダー像（エマ・ダルトン）

三人目の講演者はエマ・ダルトン（Emma Dalton）が務めた。オーストラリア出身で、現在、神田外語大学日本研究所

い」「怖い」というメッセージがよく報道されているにもかかわらず、いわゆる「出会い系サイト」とひと味違った婚活をしている人を対象とする「恋愛マッチングサイト」を利用している人は、確実に増えているのである。

今回分析するサイトは次の五つ。

- エキサイト恋愛結婚
- ブライダルネット（Bridalnet）
- Youbride
- 楽天オーネット（O-net）
- Yahoo! お見合い

宣伝、ウェブサイト、成立したカップルの「ストーリー」といった一般市民でも閲覧できる情報を分析した。予備的分析の結果として、次の二つのことがいえる。

①オンラインマッチングサイトは「典型的な男女像」を強調する。特に夫婦の男女役割分担が強く謳われており、そこからは「大黒柱」という典型的な男性像がはっきり浮かんでくる。例えば「Youbride」以外のサイトでは、いずれも登録する際に、その利用条件として男性のみに「収入」の条件を付している。具体的には男性に「定職」や「定収入」がないと入会できないという条件である。

②また、男女が結婚生活で求めるものが違うということも、サイトに反映されている。男性には結婚したら「規則正しい生活」が送れるようになるという期待があるらしい一方で、女性は結婚したら「幸せになる」というイメージを持っていることが浮かんでくる。また、男性は奥さんに、特に食事の面で頼ることになるようである。「理想的な奥さん」は料理が好きだ、というイメージは特に「成立したカップルのストーリー」にもはっきり明記されている。

ただし、以上の分析結果は、あくまでもこれらのオンラインマッチングサイトの価値観に基づいているものである。

インターネットを通して結婚相手を探している人々は世界各国で増加している。この現象からは、その社会と文化における男女関係、男女のあり方について、いろいろなことが見えてくる。一九九〇年代にインターネットが個人と個人を繋ぐコミュニケーションの道具として使われるようになった時点からオンライン恋愛時代に突入した欧米と、最近インターネットを通してお見合いや結婚活動をするインドという国々についての学術的な研究・分析が豊富にあり興味深い。本研究ではそうした状況下での「日本」の存在を明らかにしたいと考えている。さらに、少子化時代の中で恋人あるいは結婚

相手を探す人々の苦労が明らかになることも期待する。そして、マクロな面からは、現代社会の男女のあり方の変化と存続が浮き彫りになるだろう。男女は恋愛・結婚の面で何を求めているのか、そして異性に何を期待しているのかをより詳しく深く把握することで、日本の現代社会・文化の理解が深まる。このような問題を研究することによって、ジェンダー、恋愛、結婚、親密さに関する社会における規範の変化がさらに浮き彫りになることを願っている。

エマ・ダルトン先生

三人の講演のまとめ

三人の研究者の専門分野についての話はいずれも示唆に富むもので、非常に有意義な講演会になった。恋愛、ジェンダー、メディアなどという身近な話題だったこともあり、会場には多くの参加者が集まった。本学の学生・教職員のみならず、外部からの参加者も多数見受けられ、本学日本研究所とグローバル・コミュニケーション研究所にとっても大成功といえるものとなった。次の講演会にも、多くの参加者が来場してくれることを願う次第である。